

平成 18 年度イニシアティブ報告書

イタリア文化会館におけるシンポジウム

尹 鈺喜

映画－労働の世界における女性

フランチェスカ・コメンチーニ監督、ニコラ・ブラスキ主演の『ママは、負けない』(Mi piace lavorare)は、病気の父親と幼い娘を抱えているシングルマザーの女性が会社の経営陣が変わることによってリストラの対象になり、不当な業務変更やさまざまないじめに耐える姿を描いている作品である。この作品では、会社側がリストラの対象者を追い出すために行う巧妙な態度、会社側の不当な態度や同僚からのいじめに耐える主人公の心理的苦痛、娘との葛藤や和解などを繊細に表現している。塩野七生氏は、会社内の不当な人事事項やリストラ問題は女性の問題だけではなく男性も同じ状況に置かれていると指摘したのである。しかし、職場において女性は男性よりも不利な立場になりやすい面が大いにあると考えられる。特に、子どもを持つ女性の場合、妊娠・出産を理由にやめさせられることが多い現実であり、育児休業を取ることができても会社に戻って同じ仕事を続けられるのは非常に困難である。女性の経済活動参加者の中、非正規雇用職の割合が非常に高いことから女性において仕事と家庭の両立の困難さが考えられる。一方、塩野氏の専門職や自由業よりは事務職のような他人代替が可能な職業を持つ女性を保護する政策が必要だというコメントは非常に印象的であった。正規雇用と非正規雇用との差を縮める

ことも大事であるという指摘もあった。おかれた状況に応じた対策の対応が必要であると考えられる。映画は、主人公が会社を相手に裁判を起こして1年後は賠償金をもらい、新しい職場も見つかる結末になっていたが、現実はより厳しい状況であろう。

女性と社会－日本とイタリア

日本とイタリアは女性と社会進出において非常に似通った特徴を持っているのである。両国ともに大学進学率や社会全般的において男女差はほとんど感じさせないぐらい縮まっているように見えるが、詳細を見るとまださまざまなところで男女差は残っている。石井先生の指摘のように日本では男性が育児休業を取ることができて、表面的には政策において男女差がないように感じられるが、現実では会社や同僚の理解を得られない雰囲気や不当な転勤をされるなど、実際に男性が育児休業を取るとは非常に困難であるという。日本では「ワーク・ライフ・バランス」を社会に普及する試みをしているが、政策の設備とともに、その政策がうまく活用できる環境を整えることも大事であると石井先生は指摘している。現代社会においては、仕事と家庭のバランスを取ることは、女性が抱えている課題だけではなく、男性においても会社と家庭の一員として権利を守ろうとする考えを持つべきである。

ゆん じんひ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 ジェンダー学際研究専攻